

2019年4月28日（日）「審きのことばの向こうに」

マタイ 23:29-36

29 わざわいだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは預言者の墓を建て、義人の記念碑を飾って、30 『私たちが、父祖たちの時代に生きていたら、預言者たちの血を流すような仲間にはならなかっただろう』と言います。31 こうして、預言者を殺した者たちの子孫だと、自分で証言しています。32 おまえたちも父祖たちの罪の目盛りの不足分を満たしなさい。

33 おまえたち蛇ども、まむしのすえども。おまえたちは、ゲヘナの刑罰をどうしてのがれることができよう。34 だから、わたしが預言者、知者、律法学者たちを遣わすと、おまえたちはそのうちのある者を殺し、十字架につけ、またある者を会堂でむち打ち、町から町へと迫害して行くのです。35 それは、義人アベルの血からこのかた、神殿と祭壇との間で殺されたバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上で流されるすべての正しい血の報復がおまえたちの上に来るためです。36 まことに、おまえたちに告げます。これらの報いはみな、この時代の上に来ます。

#### 【序論】

聖書読者は誰もが「聖書解釈者」だと言われます。聖書テキストは、読む人によって捉え方が異なりますが、いずれにしても読者は何らかの仕方で「解釈」をしているのです。日々のディボーションにおいても、私たちは聖書から何かを読み取っている。「何も分からなかった」「何も入ってこなかった」という感想もまた、御言葉と向き合った一つの結果と言えるでしょう。その人が持っている知識や霊的な状態によっても、その結果には違いが生じます。我々説教者は、一週間という限られた時間の中で、与えられたテキストと格闘し、説教壇に立たなければなりません。説教は聖書解釈の最終的な形、また目的であると言えます。そして、説教は会衆の応答によって完成されるのです。

#### 【本論】

今日は第七の「災い」を学んでいくこととなりますが、ここでは律法学者・パリサイ人の「聖書の読み方」が問題とされています。彼らは確かに聖書の研究者であった。しかし、聖書を「読めて」はいなかった。聖書テキストが語っている真理を捉え、自分の生き方を問うという段階にはまったく至っていなかったのです。

## 本論 1. 預言者迫害の歴史からの分離

わざわざだ。偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは預言者の墓を建て、義人の記念碑を飾って、『私たちが、父祖たちの時代に生きていたら、預言者たちの血を流すような仲間にはならなかつたらう』と言います。(23:29-30)

主イエスの時代には、立派な墓を建てるのが重要視され、過去に死んだ名のある人物の墓が作り直されたりしていたようです。これは、先人に敬意を表し、恋しく思い出すために行なわれていました。「記念碑を飾る」というのも目的は同じで、定期的に花を添えることによって、亡くなった人に名誉を与えようとしたのです。

私たち日本人にとってもお墓は大切なものではないでしょうか。最近でこそ「散骨」や「樹木葬」といった手段が採られるようになってきていますが、古くからの日本人の感覚としては「崇り」を恐れるため、弔いは丁寧になされる傾向があります。ユダヤ人の感覚は全然違うとは思いますが、お墓にお金をかけることで故人に対する償いを表したそうです。生きている間にもっと大切にしていられなくてごめんね、といったところでしょうか。

「預言者」と「義人」は置き換え可能の言葉ですが、この人々が生きたのは当時から数えて400年以上も前のことです。そんな昔の人の墓を作り直し、お墓参りをし、花を添える。何のために？彼らは宗教的敬虔を表すためにそのようなことをしていたのです。しかし、主イエスはこの行為の内に隠された偽善を見抜いておられた。彼らが言っている言葉に注目しましょう。「私たちが、父祖たちの時代に生きていたら、預言者たちの血を流すような仲間にはならなかつたらう」。これは何を意味するか。旧約の時代には、神から遣わされた多くの預言者が殺されました。それは彼らが、民を治める王の悪政を批判し、悪政を支持する宗教家たちと激しく対立したからです。彼らは真理を語り、神の義を宣べ伝えました。しかし、世の権力の前には無力であり、預言者たちは全き無理解のうちに葬り去られたのです。

預言書というのは、その意味で「預言者の殉教史」であると言ってもよいでしょう。神のことばが殺された歴史であります。神の民が神のことばを踏みにじるといふ負の歴史がそこには描かれているのです。この預言書の編纂を行ない、その精神を受け止めようとしたのが、ほかならぬパリサイ人たちであった。彼らの貢献は重要でした。彼らは、二度とそのような歴史を繰り返してはならないという思いで、そのような働きを始めたのでしょう。そして、自分たちを、過去に預言者を殺した人々の罪から切り離すかのようにならなかつたらう」と唱えていました。

皆さん、ここには聖書解釈上(歴史解釈と言ってもよい)の重要な問題があるのです。旧約聖書は神に従うことのできなかつた神の民(あるいは人類)の歴史が描かれている。この「不従順の歴史」は、すべての人間の生来の状態を描いていると言ってもよいでしょう。人は神に背を向けて生まれてくる。神のことばに聞き従うことを嫌う性質を持っているのです。神ではなく自分を第一としたい。預言者を殺害する人々は、神のことばを憎むすべての人間の姿を象徴的に描いています。読者は自分自身の問題としてこれを受け留めなくてはならない。

ここには紙一重の問題が潜んでいるのです。迫害された預言者を敬い、彼らの精神を受け継ぐことは確かに重要でしょう。しかし、彼らを殺した人々を他山の石とし、「俺はあいつらのようなことはしないぞ」と主張するのは、神に対する傲慢と言えないでしょうか。何と彼らは、そのように言いながら、イエスを殺害する計画を練っていたのです。預言者の中の預言者、「神のロゴス」であるイエス・キリストを亡き者とする。ここには、かつて預言者を殺した人々を凌ぐ罪があります。主イエスは、預言者の墓を建てながら、ご自分を殺そうとしている彼らの矛盾を鋭く指摘しておられるのです。

**こうして、預言者を殺した者たちの子孫だと、自分で証言しています。おまえたちも父祖たちの罪の目盛りの不足分を満たしなさい。(23:31-32)**

「父祖たちの罪の目盛りの不足分を満たす」とは、イスラエルの民全体で一定量の罪を犯すと神の審きが下るという考えを背景とした表現です(創世 15:16、ダニエル 8:23、9:24)。新共同訳では「先祖が始めた悪事の仕上げをしたらどうだ」と訳されています。「お前たちには、もはや悔い改めることはできないだろう。罪に縛られ、盲目となり、神に逆らう道を完成させることになるのだ。行き着くところまで行くがよい」。そのような主の激しい嘆きの表現であります。しかし、読者はこの主のことばの背後に隠された御心を読み取らなくてはなりません。預言者を通して神が語られたと同様、主イエスはもちろん彼らが自分の罪に気づき、悔い改めに至ることを願っておられるのです。

## 本論 2. キリストの弟子たちの迫害

**おまえたち蛇ども、まむしのすえども。おまえたちは、ゲヘナの刑罰をどうしてのがれることができよう。だから、わたしが預言者、知者、律法学者たちを遣わすと、おまえたちはそのうちのある者を殺し、十字架につけ、またある者を会堂でむち打ち、町から町へと迫害して行くのです。(23:33-34)**

「まむしのすえども」という苛烈な表現は、バプテスマのヨハネも使っていました(3:7)。これは「悪魔の一味」というほどの凄まじい表現で、今のままではあなたがたの行き着

く先は地獄だという最後通告です。

主イエスはご自分の手で「預言者」「知者」「学者」を遣わすと言われます。これはまるで神が預言者を旧約の民に派遣したかのような言い方です（神であるとの宣言）。ここで派遣される人々は、主イエスに着く伝道者、教会のリーダーのことでしょう。しかしこの後、教会は厳しい迫害の時代に入っていきます。旧約の預言者が受けたと同様の迫害を主の弟子たちが味わっていくことになる。パウロの言葉を読んでみましょう。

彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうです。労苦したことはずっと多く、牢に入れられたこともずっと多く、むち打たれたことははるかに多く、死に直面したこともたびたびありました。ユダヤ人から四十に一つ足りないむちを受けたことが五度、ローマ人にむちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度、一昼夜、海上を漂ったこともあります。何度も旅をし、川の難、盗賊の難、同胞から受ける難、異邦人から受ける難、町での難、荒野での難、海上の難、偽兄弟による難にあい、労し苦しみ、たびたび眠らずに過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さの中に裸でいたこともありました。ほかにもいろいろなことがあります、さらに、日々私に重荷となっている、すべての教会への心づかいがあります。

（Ⅱコリント 11:23-28）

真のキリスト者はいつの時代であっても、真理を語るがゆえに苦しむ存在なのです。主イエスが言っておられ「苦難」の中には「十字架につけ」という表現も出てきますが、これは恐らく比喩的な意味で、ご自分の受難と弟子たちの苦難とを重ね合わせておられるのでしょう（10:24-25）。

それは、義人アベルの血からこのかた、神殿と祭壇との間で殺されたバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、地上で流されるすべての正しい血の報復がおまえたちの上に来るためです。（23:35）

「アベルからザカリヤ」というのは、旧約聖書全体の殉教史を言い表す表現です。アベルは兄カインによって殺された最初の主のしもべであった（創世記4章）。「バラキヤの子ザカリヤ」が誰のことなのか、少々分かりにくい面があるのですが、恐らくⅡ歴代 24:20-22 で神のことばを語り、民の罪を明らかにした結果、石で打ち殺された「エホヤダの子ゼカリヤ」を指しているのでしょう。ヘブル語正典ではⅡ歴代史が最後の書に当たるので、主はアベルとザカリヤの死を取り上げたのだと思われ<sup>1</sup>。

---

<sup>1</sup> ゼカリヤの父親の名前に違いが生じるが、これはユダヤ人の伝承の中でⅡ歴代史の「エホヤダの子ゼカリヤ」とゼカリヤ書の「ベレクヤの子ゼカリヤ」が混同されることがよくあったからだろう。

重要なことは、主イエスご自身がこの「殉教史」の線上に置かれようとしていることです。そして、主イエスを殺そうとしている人々は、旧約預言者を殺した人々と同様、自分の問題にまったく気づいていないのです。それどころか、彼らは「俺たちがあの時代に生きていたら、預言者を殺すようなことはしなかつたらろう」と主張していた。自分のやっていることが見えない。分からない。これが私たち人間の姿だと言えないでしょうか。

## 【展開】

読者はこの記事から何を読み取らなくてはならないのか。およそ、自分を他の誰かよりはマシだと考えていることほど神が忌み嫌われる罪はありません。自分の罪に気づかないことこそが最大の罪なのです。

私は人生のある時期に、自分の霊的な目が一挙に開かれたような経験をしたことがあります。自分の罪が分かり、そこから解放されたことを知ったのです。全身が軽くなるような体験でした。ところが、すぐそこに落とし穴がありました。周りの人たちの霊的な目が、自分のようには開かれていないように感じたのです。その頃の私の思いは傲慢そのものでした。

三浦綾子さんの名著『塩狩峠』の主人公、永野信夫という人について、少しふれさせていただきます。永野青年は、名寄<sup>なよろし</sup>駅から鉄道で札幌へ向かう途中、塩狩峠の頂上にさしかかろうという時、最後尾の車両の連結部が外れたことに気づき、自ら身を投げて汽車の下敷きとなり、多くの乗客の命を救いました。これはノンフィクションの物語です。彼はキリスト者として証の人生を全うしたのですが、彼が正しく生きてきたがゆえに認識できなかった「キリストと自分との関係」ひいては「罪の認識の問題」をよく描いた箇所があります。

(伝道者伊木一馬との会話より)

「そうですか。では、もう一度質問しなおしますがねえ。永野君、君はイエスを神の子と信ずると言いましたね。そして、キリストに従って一生暮らすと言いましたね。人の前でキリストの弟子だということもできると言いましたね」 信夫はハッキリとうなずいた。「しかしね。君はひとつ忘れていたことがある。君はなぜイエスが十字架にかかったかを知っていますか」 信夫はちょっとためらってから、「先ほど先生は、この世のすべての罪を背負って十字架にかかれたと申されましたが……」「そうです。そのとおりです。しかし永野君、キリストが君のために十字架にかかったということを、い

や、十字架につけたのはあなた自身だということを、わかっていますか」 伊木一馬の目は鋭かった。「とんでもない。ぼくは、キリストを十字架になんかつけた覚えはありません」 大きく手をふった信夫をみて、伊木一馬はニヤリと笑った。「それじゃ、君はキリストとなんの縁もない人間ですよ」 その言葉が信男にはわからなかった。

(電子書籍 p. 651-652)

### 【結論】

聖書を読む上で、もし私たちが「アダムの罪」と自分とを分離しようとしていたとしたら、それは神の御前に全的に墮落した自分をまだ知らないということになるでしょう。また、主イエスを十字架につけた者、主を裏切って逃げた弟子たちを笑い、「俺ならそんなことはしなかつただろう」と言うなら、私たちはまだ聖書を「読めて」はいないのです。また、過去の戦争の歴史を振り返り、あんな愚かな過ちを自分は犯さないと主張するなら、それは人間全般が抱える闇を知らないことになるでしょう。戦争とは、人間の罪の行き着く先を描いている。ほかならぬ私たち人類がやってきたことであり、私たちはその一部なのです。

聖書は常に人間の罪を明らかにし、そこからの救いの道を示しています。律法学者・パリサイ人に対する主イエスの厳しい宣言の中にさえ、救いに導こうとする切なる思いがあることを、見落としてはなりません。私たちがどんなに悪しき状態にあったとしても、主は泥沼からさえ私たちを救い得るお方なのです。

### 【祈り】

聖なる神よ。御前に罪を重ねてきた人類を憐れんでください。私たちが想像もできないほどひどい出来事が、この世では起きています。しかし、私たちもその歴史を築いている一人にほかなりません。私たちの罪をお赦してください。主イエスの死は私たちの罪のためであったと、今ここに告白いたします。

### 【祝祷】

仰ぎ願わくは、

ご自身の「ことば」なる預言者を、罪の世に送り給うた、父なる神の愛。

最終的な「神のロゴス」として世に降り、真理のゆえに死に給うた、主イエス・キリストの恵み。

己の内に潜む闇に気づかせ、いかなる者をも救いうる神の御手に依り頼ませ給う、聖霊  
の親しき交わりが、  
我ら一同と共に、とこしえにあらんことを。